

## 生と性

——バタイユを中心に——

海老名宜陽

### はじめに

人間の生命について考えると、それは非常に孤独なものだと気づかされる。私たちは理由も分からないままこの世に生まれ、死という結末以外、何もかもが謎に包まれた未来に向かって歩いていく。

そして私たちが死を迎えるとき、それは孤独の中で人生が終わることを意味する。たとえ友人や家族に見送られようとも、死は誰とも分かち合うことができない。自分の死は自分だけのものであり、誰も自分の代わりには死んでくれず、自分もまた誰かの代わりに死ぬことはできない。そんな孤独の中に生きるのが、私たちだと言える。

そんな、人の孤独な生命を十全に生きる道を、エロティシズムの中に見出したフランスの思想家ジョルジュ・バタイユを手掛かりとして、人の生命と性との関係性を中心としながら、人の生き方について考えていきたい。

### 1. ジョルジュ・バタイユについて

ジョルジュ・バタイユはフランスの思想家で、1897年9月10日に、フランス中部のビヨンという町に生まれ、主に図書館で勤務しながら、論文や小説を執筆および刊行した。そして、1962年7月8日、頸部動脈硬化症でこの世を去った<sup>1</sup>。

バタイユの思想は、人間の性や死、暴力が中心となって展開される。日本においては作家の三島由紀夫が共感を寄せ、「現代ヨーロッパの思想家でいちばん親近感をもっている人がバタイユ」<sup>2</sup>と評したことで知られて

---

<sup>1</sup> 酒井健（1996年）『バタイユ入門』ちくま新書、26-31頁。

<sup>2</sup> 「図書新聞」編集部編（2022年）『三島由紀夫 最後の言葉 三島由紀夫と「図書新聞」の20年』武久出版、32頁。

いる。

バタイユの著作は複数あり、初期は『太陽肛門』や『眼球譚』といった小説を発表していたが、晩年は理論書が多くなり、『蕩尽』『エロティシズム』『エロスの涙』などの書籍が記された。晩年の理論書は、一貫した思想を共有しながらも、主として取り上げられるテーマがそれぞれ大きく異なっていることが特徴である。例えば『蕩尽』では、タイトルにもなっている蕩尽(消尽)という概念が中心となって論が展開されるのに対し、『エロティシズム』では、禁止と侵犯および死への接近によって生の極地へ到ろうとするエロティシズムの概念が中心となっている。

本稿では中でも『エロティシズム』で展開されるエロティシズム論を手掛かりとしながら、人間の性についての理解を深め、孤独や不安、恐怖と共に生きるということについて考えていきたい。

## 2. 生殖とエロティシズム

人の命は生殖に始まる。これは人間だけに限定されるわけではなく、すべての有性動物に共通する事実だ。

だが一方で、性的行為をエロティックなものとしているのは、人間だけである。動物は公衆の面前であっても、恥じらいなく生殖行為に耽ることがあるが、人間はそうではない。人間は生殖行為を恥ずかしいものとして捉え、話題にすることすら避けようとする。このような忌避感とそこから発するエロティックな感覚は、人間固有のものである。このことからエロティシズムとは、種の保存を目的とした単なる生殖活動とは全く異なるものだとわかる。

それでは、人間のエロティシズムを動物の生殖行為と決別させているものとはなにか。

それは禁止の有無だ。動物の生殖行為に禁止事項はないが、人間のそれには無数の禁止が課せられている。この禁止こそが、人間と動物の生殖行動の決定的な違いであり、人間の生殖行為をエロティックなものとする要因である。

エロティックな行為に限らず禁止事項は、様々な領域に課せられ、社会

生活を営む上で欠かすことができないものだが、その最も基本的な役割は、暴力行為の禁止にある。暴力が横溢すれば、社会は成立しえない。そのため、暴力は規則によって禁じられる必要がある。

この暴力の禁止は、敷衍すれば私たちが死から遠ざけることだといえる。禁止は、私たちが死へ接近することを阻むものだ。

だが一方で禁止事項は、条件つきで容認されることがある。たとえば祝宴の場では、日常で禁じられている豪華な食事が許され、生贄の動物が屠られる。あるいは戦争では殺人が許される。

この点についてバタイユは、禁止の真の目的を以下のように鋭く分析している。

度はずれに荒れ狂う暴力を前にして、唯一存続できたのは非理性的な嫌悪、恐怖心だけだったのだ。これこそタブー〔禁忌〕の本質なのである。タブーは、冷静さと理性の世界を可能にするのだが、しかしタブー自身、大本では恐怖の震えなのだ。この震えは、知性ではなく感性に強く働きかける—ちょうど暴力がそうであるように（人間の暴力は、本質的に合理的計算の所産ではなく、怒り、怖れ、欲望など感性的状態の所産である）。禁止の非理性的な性格を考慮に入れなければ、禁止につねに結びついている、論理への無関心という事態をどう理解することはできないだろう。それだから私たちは非理性的な領域で考察をおこなわねばならず、次のように言うておかねばならないのだ。「侵犯してはならない禁止がときとして侵犯されることがある。だがこれは、その禁止が不可侵でなくなったということを意味しているのではない」。私たちはさらに、次のような不条理な主張にまでたどりつくことになる。「禁止は侵犯されるために存在している」<sup>3</sup>。

禁止は侵犯されるために存在している。禁止は侵犯の発生を予見してい

---

<sup>3</sup> ジョルジュ・バタイユ著、酒井健訳（2004年）『エロティシズム』ちくま学芸文庫、102-103頁。

るだけでなく、むしろその侵犯を合法的に挙げるために存在しているのだと、バタイユは喝破した。禁止が設けられることではじめて、禁じられた行為に注意が向けられるようになり、そのうえでなされる侵犯に権威が備えられるようになる。つまり禁止は逆説的に、禁止された行為を侵犯という形で、合法的かつ荘厳に執り行うことを命じる装置としての役割を果たすのだ。

この意味で、厳粛な禁止が実現しようとする境地とは、その禁止を徹底的に打ち破った先に広がるものだといえる。

そしてここに、バタイユの思想の核が垣間見える。すなわち、一見すると相矛盾するかに思える二つの概念は、その両極においてぴたりと符合するのだという思想が。

### 3. 禁止と祝祭

禁止が導入されるとそれを境として、禁止の世界と侵犯の世界の二世界が現れるようになる。禁止の世界とは俗なる世界のことだ。より具体的に言えば、これは労働の時間を指す。日々の労働では禁止事項が遵守される。

一方、侵犯の世界とは聖なる世界だ。祝祭は聖なる時間に該当する。そこでは、俗なる時間で禁じられた行為が赦免され、侵犯が合法化される。平時では禁じられた死への接近が、祝祭では許されるようになる。

聖なる時間に禁止を侵犯することには、不安が伴う。この不安は、俗なる時間で禁止を厳しく遵守するほど、より一層険しいものになる。普段遵守する禁止が厳しければ厳しいほど、それを侵犯したときの衝撃は大きなものとなる。

バタイユの生きたキリスト教文化圏では、禁止の侵犯は罪として理解される。そして、罪を犯せば当然それに対する罰が予期された。したがって、キリスト教世界において侵犯の衝撃は、神罰への恐怖という形で理解される。

そして、この衝撃および恐怖が、後述するエロティシズムの極地に至る力となる。エロティシズムがもたらす極限の感動は、大いなる禁忌を侵すことでのみ達せられる。

ゆえに本来的なエロティシズムとは、切実であり、恥じらいがあり、罪悪感があり、そしてそれゆえに激しく感動的なものである。現代の世界に蔓延する、商業化された猥褻物は、この禁忌の感覚を削ぎ落してしまっている。そこには恥じらいがなく、特別な祝祭としての趣もない。当然、激しい感動も湧きあがらない。これでは、エロティシズムの極地に達することはできない。

#### 4. エロティシズムの極地

エロティシズムの極地とはなにか。それを知るためには私たちが抱える不連続性について理解せねばならない。バタイユは不連続性を以下のように説明している。

生殖をおこなう存在は互いに異なっている。産みだされた存在も相互に異なっているし、彼らを産みだした存在とも異なっている。各存在は自分以外の他のすべての存在と異なっている。各存在の誕生、死、そして生涯におけるさまざまな出来事は、他の存在たちに対し利害を及ぼしうるが、直接的に利害が及ぶのは当の存在だけなのだ。この存在だけが生まれ、この存在だけが死んでゆくのである。一個の存在と他の存在とのあいだには深淵があり、不連続性があるのだ。

この深淵は、たとえば、私の話を聞いているあなたがたとあなたがたに話しかけている私とのあいだにも横たわっている。私たちは交流しようとするが、私たちのあいだのいかなる交流も本源的な相違を消し去ることはできないだろう。あなたが死につつある場合でも、死につつあるのは私ではないのだ。私たち、すなわちあなたと私は、不連続な存在なのだ<sup>4</sup>。

バタイユは、私たちが本源的に抱えている孤独を、不連続性として表現した。つまり、周囲に隔絶があり、深淵があり、孤立していて、なにもの

---

<sup>4</sup> 前掲書、19-20頁。

にも繋がっていない、そのような意味で私たちは不連続な存在だといえる。

そしてこの不連続性を前にした私たちが抱く憧憬について、バタイユは以下のように説明する。

私たちは不連続な存在であって、理解しがたい出来事のなかで孤独に死んでゆく個体なのだ。だが他方で私たちは、失われた連続性へのノスタルジーを持っている。私たちは偶然的で滅びゆく個体なのだが、しかし自分がこの個性性に釘づけにされているという状況が耐えられずにいるのである。私たちは、この滅びゆく個性性が少しでも存続してほしいと不安にかられながら欲しているが、同時にまた、私たちが広く存在へと結びつける本源的な連続性に対し強迫観念を持ってもいる<sup>5</sup>。

ここで、不連続性に対立する概念として、連続性が現れていることに注目したい。連続性は、孤立しておらず、事物が融合しており、混然一体となった総体である。そこでは個別の事物は存在せず、各存在の輪郭は消失している。孤立した存在である私たちがノスタルジーを抱く対象としての永遠こそが、連続性だといえる。

しかし、バタイユは連続性を、私たちが認識しうるものではなく、体験することしかできないものだと説明している。

では、どのような時に連続性を体験することができるのか、引き続き引用したい。

存在の連続性は個々の存在の根源にあるのであって、死は存在の連続性に到達しない。存在の連続性は死に依存していない。しかしそれでいて、死は存在の連続性を露に示すということだ。この見解は、宗教的な供犠を解釈するときの基礎になるはずだと私には思える。私は先ほど、エロティックな行為は供犠に似ていると語った。エロティッ

---

<sup>5</sup> 前掲書、24-25頁。

クな行為は、これに関わる者たちを溶解し、彼らの連続性を顕現させる。波立つ水の連続性を想起させる連続性を、だ。供犠においては、生贄をただ裸にするだけでなく殺してしまう（生贄が生き物でないときには、この生贄を何らかの仕方で破壊してしまう）。生贄は死んでゆく。このとき、供犠の参加者たちは、生贄の死が顕現させる要素を分有する。この要素は、宗教史家とともに、聖なるものと呼びうるものだ。まさしく聖なるものとは、厳粛な儀式の場で不連続な存在の死に注意を向ける者たちに顕現する存在の連続性のことなのである。暴力的な死のおかげで、一個の存在の不連続性が破壊されてしまうのだ。あとに残るもの、しのびよる静寂のなかで参加者たちが不安げに感じるもの、それこそが存在の連続性である<sup>6</sup>。

このような、連続性の感覚を得ること、それこそが、エロティシズムの極地だ。このような営みは、子孫繁栄や生殖を度外視した、純粋な心理的探求だといえる。

そして、エロティシズムの極地で不連続な私たちに連続性を感覚させるもの、それは死だ。死は私たちに、存在の連続性を看取させることがある。それは厳粛かつ暴力的な供犠の中で生贄の死とともに訪れる静寂の中に感じ取られる。

バタイユはエロティックな行為と供犠の間に共通点を見出していた。それは死を伴わない殺人として表現される。服を脱がせるという行為は、相手の外壁を取り払うことを意味し、それは外部との融合を暗示する。外部との融合の条件とは、個々の存在の外壁が消失し、融解することであり、これは存在の消滅を意味する。つまり相手を消滅させようとする暴力の領域であり、エロティシズムが平時は禁止されていることとも符号する。

存在の連続性は、エロティックな行為を通じて自己の存在が希薄になり、意識が曖昧になるほどの激しさの中で、はじめて感じ取られる。そこまでの激しさへ到るためには、禁止を侵犯しているという自覚が欠かせない。

---

<sup>6</sup> 前掲書、36頁。

それはバタイユの言葉では小さな死として表現される体験であり、つまり臨死体験だといえる。

したがって、エロティシズムとは、死への限りない接近により生を究極的に際立たせる営みだといえる。性が極まった絶頂こそが、生の頂であり、エロティシズムの極地となる。そこは連続性が垣間見える、限りなく死に隣接した断崖だ。

## 5. 死

バタイユの思想の根底には、死が私たちに魅了する、という確信が秘められている。私たちが、自分が死ぬということはどういうことで、自分の死後自分の意識はどうなってしまうのか、ということ考えた時、不意に全身を襲う恐怖の震えに直面することがある。その震えは、私たちの精神を引き裂くようなものであると同時に、感情が激しく揺り動かされるといいう意味で、文字通り感動的だともいえる。

人間と動物の生殖における差異は禁止の有無であったが、まさにこの禁止を成立させるものこそ、この死に対する恐怖あるいは感動なのである。禁止の根底に潜む嫌悪感、論理ではなく感性に由来するため、非論理的な側面があるとバタイユは述べているが、まさにこの嫌悪感の根底にあるものが、死への恐怖だといえる。

死の恐怖が、個体に死を回避させるために嫌悪感を育み、その嫌悪感に基づいて禁止が設けられるようになる。そして先述の通り、禁止は禁止した事項へ厳かに接近するための装置であると理解すれば、禁止があることで最終的に私たちは、嫌悪感の源泉である死の恐怖へと接近することになる。この理解においては、まさに死は避けるべき恐怖の根源であり、そして同時に、私たちに誘い、魅了するものである。

従って、人間が動物と異なった存在であるためには、禁止が必要であり、その禁止を生み出すためには、死を深く恐れている必要がある。

つまり、死に自覚的であることこそが、エロティシズムの必要条件だということだ。そしてこの点を晩年のバタイユは『エロスの涙』の中で繰り返し指摘している。



われわれがすでに見たとおり、どうやら毛で覆われていたらしいネアンデルタール人は、死の認識を持っていた。この認識からこそ、エロティシズムが現われるのであって、それは人間の性生活を動物の性生活に対置するものなのだ<sup>7</sup>。

猿は、まさに、死の認識が欠如しているかぎりにおいて、エロティシズムを知らないのだ。それは、われわれが人間的であって、死の暗い見透しの中で生きており、エロティシズムの激発的な激しさ、その絶望的な激しさを認識しているという事実とは反対の事柄である<sup>8</sup>。

死の認識こそがエロティシズムを可能にし、そこから禁止を生じさせるのである。

そのようなエロティシズムの奥義について、バタイユは、エロティシズムを「死におけるまで生を称えること」だと説いた上で、次のように説明している。

死におけるまで生を称えるということは、(中略) 平然と死に挑むということなのだ。生は存在への接近である。生はいずれ死ぬはずのものではあるが、存在の連続性はそうではない。連続性への接近と連続性の陶酔感の方が死についてあれこれ考えることよりも勝っている。第一段階として、直接的なエロティックな混乱が、すべてを上回る感覚を私たちに与える。それは、不連続な存在の状況に関係した陰鬱な展望が忘れ去られるといった感覚だ。第二段階としては、若々しい生に開かれた陶酔を超えて、真正面から死に近づく力、そしてこの死への接近のなかに、理解しがたく認識しがたい連続性への開けを見る力が私たちに与えられる。この連続性への開けこそエロティシズムの奥義であり、またエロティシズムだけがこの開けの深い意義をもたらす

---

<sup>7</sup> ジョルジュ・バタイユ著、森本和夫訳（2001年）『エロスの涙』ちくま学芸文庫、35頁。

<sup>8</sup> 前掲書、37-38頁。

のだ<sup>9</sup>。

バタイユはエロティシズムの極地に、死を真正面から見つめ、それを克服する境地を見ていた。つまり私たちが抱く根源的な恐怖は、エロティシズムによって乗り越えられるものだと理解された。

そして、これに関連してバタイユは、マルキ・ド・サドの以下の文章を引用している。

死を淫蕩な発想に結びつけることほど、死と慣れ親しむための良策はない<sup>10</sup>。

死をどのように受容すればよいか、という問いは、私たちにとって普遍的な問題であるが、その一つの解として、バタイユは、サドを参考に、性的陶酔の中で恐怖に挑みかかる、という活路を見出した。

それが象徴的に描かれた一節を、若き日のバタイユが精神の治療の一環として著した著作『太陽肛門』から引用したい。

君は夜である、と言い渡した上で相手の女性を犯しながら、自分も喉笛をかき切られるのが私の念願である<sup>11</sup>。

これこそまさに、エロティックな混乱の中で、陶酔感に浸ったまま死を迎えるという瞬間だ。死を覚悟したうえで、性的な行為に及び、興奮が最高潮に達した瞬間に、死を受け入れようとするこの姿勢は、まさに死と淫蕩を結びつけ、死に挑みかからんとする態度だと言えるだろう。

だが、実際のところは、エロティシズムの境地に本物の死は到来しない。繰り返しバタイユが指摘しているように、エロティックな行為の果ては「小さな死」であって、死そのものではない。

---

<sup>9</sup> ジョルジュ・バタイユ (2004年), 40頁。

<sup>10</sup> 同上, 42頁。

<sup>11</sup> ジョルジュ・バタイユ著, 生田耕作訳 (1971年)『眼球譚』二見書房, 161頁。

小さな死と本当の死は別のものである。そのため、エロティシズムの境地は安易な自殺ないし他殺を推奨するものとは全く異なる。『太陽肛門』でのバタイユの記述は示唆的ではあるが、その後に著された著作を見れば、死を強要するものではないことが分かる。加えて、バタイユは自ら命を絶っておらず、病によってこの世を去っている点も指摘したい。

エロティシズムの極地はあくまでも連続性への接近であり、その方法として小さな死が経験されるが、実際に死ぬことはなく、当然、死ぬこと自体が目的なのではない。

## さいごに

バタイユの思想を概観し、エロティシズムとその極地について見てきた。最後に、三島由紀夫のバタイユ理解について取り上げたい。

三島は死の直前のインタビューにて、以下のように発言している。

美、エロティシズム、死という図式はつまり絶対者の秩序の中にかエロティシズムは見出されない、という思想なんです。ヨーロッパなら、カトリシズムの世界にしかエロチシズムは存在しないんです。あそこには厳格な戒律があって、そのオキテを破れば罪になる。罪を犯した者は、いやでも神に直面せざるを得ない。エロチシズムというのは、そういう過程をたどって裏側から神に達することなんです。(中略)

ぼくの考えでは、エロティシズムという名がつく以上は、人間が体をはって死に至るまで快楽を追求して、絶対者に裏側から到達するようなものでなくちゃいけない。だから、もし神がなかったら、神を復活させなければならぬ。神の復活がなかったら、エロティシズムは成就しないんですからね。ぼくは、そういう考え方をしているから、無理にでも絶対者を復活させて、そしてエロティシズムを完成します。これは、その辺にある日常的なセックスなんかと、まるで次元が違う。まあ一種のパン・エロティシズムなんですよ。ぼくは、その追求がぼ

くの文学の第一義的な使命だと覚悟しているんです<sup>12</sup>。

バタイユは戒律の侵犯を経て連続性に到達するエロティシズムの在り方を説いた。三島はこの連続性を超越的なものとして捉え、それは天皇であるべきだという思想に発展させた。

だがバタイユはこの連続性について、連続性以上の表現では語っていない。キリスト教の世界においてこの連続性は神であるが、あくまでもそれはキリスト教圏に限定された話だ。バタイユの理論では、ただ連続性として理解されている。

バタイユの描く純粋な連続性は不滅であり、永遠である。だがそれは、それ以上減びようのないもの、という意味における不滅であり、いわば無である。なにも無いからこそ変化も減びも無い。

無は私たちの命に意味を与えはしない。バタイユはエロティシズムの中に、死の不安から脱却する糸口を見出したが、そこでは生の不連続性という孤立を、孤立のままに留めている。私たちの生命は孤立した必滅のものだ、という観念に、性的陶酔の混乱を添えただけで、私たちは十全に生を肯定し死を受容できるだろうか。

この孤立した私たちの命にどのような意味を付与するかは、バタイユの説く連続性をどのような概念として捉えるかということにつながる。私たちが連続性をどのように捉えるかは、個人、国、文化、宗教など、個別に委ねられていることとなる。そのうえで、三島は連続性という超越的概念には、天皇がふさわしいと考えた。

ここに、生と性、二つの要素を繋ぎ止める「聖」があるのではないだろうか。永遠を志向したとしても、その永遠が空虚であっては命まで虚しくなってしまう。バタイユのエロティシズムが向かう先に、「聖」なるものを想定して初めて、人生を肯定する土台が整うのではないだろうか。三島がなそうとしたことは、まさにそれだ。

一方で、近代以降、世俗化した世界で、そのような概念を同じ形で導入

---

<sup>12</sup> 「図書新聞」編集部編（2022年）、35-36頁。

することは難しい。これも三島が最期に証明した通りだ。

そのような現代で、「聖」に相当する価値を、私たちはどのように保持することができるか。生と性、そしてそこに連なる最後の聖、この三体について、機会を改めて考察したい。

[参考文献]

ジョルジュ・バタイユ著、生田耕作訳（1971年）『眼球譚』二見書房。

ジョルジュ・バタイユ著、森本和夫訳（2001年）『エロスの涙』ちくま学芸文庫。

ジョルジュ・バタイユ著、酒井健訳（2004年）『エロティシズム』ちくま学芸文庫。

ジョルジュ・バタイユ著、酒井健訳（2018年）『呪われた部分—全般経済学試論・蕩  
尽』ちくま学芸文庫。

酒井健（1996年）『バタイユ入門』ちくま新書。

「図書新聞」編集部編（2022年）『三島由紀夫 最後の言葉 三島由紀夫と「図書新聞」  
の20年』武久出版。